紫文製錦

雜三

六

紫文裳錄六卷目錄

旌三

賀 初丁
婚姻 二
壽喪 六
嬰兒 八
離別 十四
猿 十九
海語 二十
行語 廿二
病 二十四
物怪 廿四
哀傷 四十

紫文製錦六巻

安藝 源 稲彦 撰

雜三

賀

若菜上卅三丁ウ

菊のおとゞのにしれたるちいでよおましよろふ屏風

。源氏君のおましゝ。

うべしろよりハじめ。つゝしくたらひ志つゝたれ出ゆり。

うるはしくいしるどいたてぞ。源氏君のとしの数ゝ。ぢしき四十枚ゆゑ

けうそくなどすべてそのゆゑどもいときよろにせさせ

あつり。らでんはこづしふるこゝろひに。はこゝろも和よつ。
すべて。夏冬はは。さうぞく。からぶくすりはこはすぐ。
ゆするつぎかくげはこ。などやうはものうちくきよ
らをつくしあつりはうざしはぶいはいぢんはしるんをは
くりあづしきあやめをつくしおるじきかけをも。又づ
うむるしたるこゝろはべあり。
同 卅六丁オ
○ぢんのをしきよはしてはわる。さるばうりまね
まつりはうゝけゆりあむく。
源氏元
小松バゝすゑのよはむにひかれてや野べのわかな

も手紙つむべき。
同 卅六丁ウ 四十枝
○ちりのようえぐ。をうひつものようぢ。四十 申納言を初
めまりてくさるべきかぎりゆりつゞきあつり。
同 上
○はうゝけくぐり。若菜はあつりのまゐるはお
はもぢんはかけばむよりは。おもむつきどもなつりしく。
まめきたるみどるせられたり。

婚姻

美 四十九丁オ
はさゝぐもなど。いつのまゐりしいでけむ。花ケうくいとき
よゝにしてもちひのさまもおとさゝひ。いとおしう

ゆくしのへたり。
○やうく夜ふけゆくなどよ。いくらうちなやこそしく。
夕霧詞
ぶりごちいとたへがたうてまうでむうちもなどく
しくこそ侍りぬべけれ。夜居ゆづりまひてむやと。
中ねよう是へなふ。おとぐ。あうむや。はやすこはもとめ
よ。おきないたくしひすこてむしいなれば。まうりいと
ぬといひすていりまひぬ中ね花のかげの旅まよ。
いかまがやくるしきあるべまが侍るやといへば。松まち
夕霧詞
ぎれるハあぐなる花かハ。ゆくしやとせあなふ。中ねハ

ちうれうちに。孫たのわざやとおりふはあれど。人さ
るれふふさまよめでたきよ。かうもありをてるむとん
がけわたることなれば。うしろやすくこちびきつ。
○見りしらぬさうよ。やもかくやくこちする夜ぞくり
夕霧詞 十六丁ウ
れ。こつぞよりだなる中よひきいれく笑いつしかね
まちおいしましければ。車のもとよ。こぞうちよせ
あむ。おろしなりなふ。
宿木 廿四丁オ
○左れおかねとのよハ。六条院の東のおとぐを。こが
夕霧詞
きあつてむく。かぎりなくよろづをとくのへてまち

きおしまゐよ。こゝ
口上
○文ハいとこゝろぐるしくおぼしながら。文めしきは
自文之
まゝろハいうでめでゝきさまよまちおもはれんとおゝろ
げさうしてえならぬたきしめまへるはけはひいたんうる
なしまちつけまへるゆゝろ此ありさまもいとおし
かりけり。ひとれはどさくやうよあへうよなどハあらぐ。
六君のさまなど
よきおどになりたるこちしまへるを。いるゝん抱く
しくあざやぎてくんぞへもたをやうなるかこハなく抱
ほこりうよなどやあらんさあらんこうこてあるけ

まるどおぼせどさやうなるはけはひよハあらぬまゐはん
ざしおろうなるべうもおぼされざりけり。
口世四丁オ
○志ん殿のこなみのひざし。ゑんがしにゐりて、おまま
わまりはぶいやはしまいれはさらなどうるはしげまきよ
らにくまゝちひさ紀ぶいふるはよく花 忍 豆 くさらぬ
もいといまあしうせさせまゐくもちゐまゐらせ
まつり。
口九十一丁オ
○うれよさりなん。女二文の君のうへいらせまゐ抱
文まうでさせまりまゐけるぎし
きいとんことなり。うへれ女房さまがらはおくりはうう

まつらせまひける。むさしの国にくひさしまさいと
とげ三。びらうげのおかしづくり六。ぶいのびらうげ廿。
おじろ二。女房三十人。わらハ志りぞうへ八人づさふ
らふまゝ（七宝志若のうちよりの事）御むかへのいらし本十二本（ソホン）御の人々の
せくるんありける。御おくりの上座ア。殿上人六位など。
いふがきりなう。きこゝろをつくさせまへりけり。
（東座十一ヤウ 嫁ゝ多漬ちまいふことばく）
。人がらハいとやむごとなくおぼしおろまくおいひ
るきこゝなりけり。わうき君をとくずきぐしくあて
びてもおいしまさぐ。世のありきるもいとよくしりまつり。

ゆやうしまふ御ゝもいとおかく侍り。まぶこはごろの御と
くなきやうなれど。おのぞからひとの御けちひのあ里
けるやうなれ。ひとのかぎりなきやうといふめる、きかむ
にたまさりまつり。らい後四位になりまるむとぞ。
ぞの（藤人郎也）御ハうらぶひなく。こかどの御くちぞからごてまへ
るなり。よろぞのことたらびてやすきあろんのかを
なんさぶめざなるハや。さるへき人えりて。うしろ三位
まうけよ。上座ア。にハわれしあれば。けふあすといふバ
（事の御詞也）
ゆまなしあげてむとこそおかせらるなれ。なまごとも

うでさしきてこそ。こかどよもあらしくはらうまはりのよ
なる。はこころをくばいみしうかうさくよ。おもくしくせん
まりしまはめかあそう人にはむこをさうやうえなふほど
に。おめかしたちゐんてうくりしあかの房よハわれもく（○家のかおの鬼）
むねとりたてまつらんとまうはぬく傍すれバ。はくよあぶ
しぶなるはけをひおくハばろぎそたにもおがしかりなん。
されどでうしろやはきてと紙めりや なりといとおかく（こまごく紫の翔し。）
よげよいひはぞくるようとあさましくむるびたるかこ（大輔なし）
にくう。ちゑてはてきくめぐり。

産養

（葵廿二丁ウ）すうしはあ葵もたけまりあへれバ。ひまおハするのやせ
く。父はは湯のくせあつるまうきおこされあひろくぶ
ひざなくうまけあひぬ。うまへしとおかはしろぎりなきま。（夕霧君誕生し）
人にうりやしあつるは。りのけどもかねつごりまど
ふけりぴ。いとりのさわぎしうく深めてとまぶいを（○胞衣のをさめ）
へめとなりし。いめぎりなき形どもたてさせあふけま
や。たひうまことなりハてぬれバ。山ぬざすあまくれと。
やむごとなき僧どもあつりがあまおせ申のごひて。

いうぎまうてね。

○かくこころことなるはいはにくすゑにいぐおいしる（柏木十丁オ）

いおぞしいうしかりなんとらひいとなくつかうまつる。

はうぶやれぎしきいかめしうおどろくしはうぶ（儀式）

さまぐにしいでゐはうぶやしなひよのつれ

をしきついがさゐたりつきなどれんぞへもことさゝ。

こころぐいどましさ見てつなん。又日れ殺ハ中宮（杜ぬん）

れはうこゝりかいりちれおまへのもの。女房れ中にも。

しなぐにゑひあそうるきハく。おかやけごとにいかめ

しうせさせまつり。はうゆとんぐきゑ十皇。ところく

れきゆう（饗）宮れ志もべちゆうれしつぎ流。なまかれ

まくでいかめしうせさせまつり。

○はうぶやしなひ。こるハ例れうで宮（白氏）れはうこゝし

ぶとまて。又日れ殺ハ大ねどのうちどんぐきゑ十皇。

碁ゑれぜよ（銭）。ゆうはんなどハよれつゐのゆうにぐこ（椀飯）

りちれおまへれついがさゐ三十ちごれはうぶいつへが

さゐにくはむつさなどぞことくしかんぞ志のびや

うに志なしまつれどさいまうに見れバいとわざとめな

まぬこころぞへまぶ見しける（句えも）宴れおまへにもせん
うれをしきたらつきやもてくふずくまねしせ
まへり。女房のおまへはいづさ日をばさるものま
ぐひわりごこ十さまぐしつくしたることもあり。
ひとめまことくしくはいとさらにしなしまゐ。
日 八十三フウ
〇宴れまうぎこれいうなりまゐ（五十日）（同。かぶへやり）
（句えも）
まひてうれりちひのいうざ紙こころにいまてこ
ものこまりごまどまぐこいれつて世れつ日れまべ
てまはあらぶとおがしこころざしてぢん。しるん。しろ

ゆ。さがみまど。こちくれさいくどもいとおかくめし
さふらはせまへばわれおとしとさるぐれとぶも
紙しいづめり。

嬰児

（八若紫卅三丁オ）（源氏名詞）
かれいたゆまうものしまゐ四一番いうでうれ。のこ
まへば。（ふ納言詞）いてくやよろぶおりかししぬさまうまおかと
（このこもまゐふと仰せられ）
しごりいつもくまど受ゆるをりしもあまこよりくる
おとしくうへしう。（紫上詞）しれちまありし源氏の君こう。
おいしたまれまどれてこまたぬとのこまふ紙ひとぐ

もなくめでたまふにぞ。いまさらのやうなれども。
なほそうなるひめ姫ぎみ。ふさわしうよさそうにぞ。
うれしやうれしやとおもふにぞ。まをさんかたもなし。
れかくちうづきをもつるおうぢ。孫ぢう
をとくとひきうけてそだてんとのこと。
いまはまろうどおりのふびんをもうけて。
のみよ。
○ひめ姫ぎみ
ものごころもなくてかくるまにのんこと

ばいうぢこまかにてをきいまさらさうなくれば。
ぢいうぢよさそうにつやつやとかうもくすめ
ふさわうよさそうにつやつやとかうもくすめ
うれしやうれしやとおもふにぞ。まをさんかたもなし。
れかくちうづきをもつるおうぢ。孫ぢう
をとくとひきうけてそだてんとのこと。
いまはまろうどおりのふびんをもうけて。
のみよ。
○ひめ姫ぎみ
ものごころもなくてかくるまにのんこと

ばいうぢこまかにてをきいまさらさうなくれば。
ぢいうぢよさそうにつやつやとかうもくすめ
ふさわうよさそうにつやつやとかうもくすめ
うれしやうれしやとおもふにぞ。まをさんかたもなし。
れかくちうづきをもつるおうぢ。孫ぢう
をとくとひきうけてそだてんとのこと。
いまはまろうどおりのふびんをもうけて。
のみよ。
○ひめ姫ぎみ
ものごころもなくてかくるまにのんこと

ばいうぢこまかにてをきいまさらさうなくれば。
ぢいうぢよさそうにつやつやとかうもくすめ
ふさわうよさそうにつやつやとかうもくすめ
うれしやうれしやとおもふにぞ。まをさんかたもなし。
れかくちうづきをもつるおうぢ。孫ぢう
をとくとひきうけてそだてんとのこと。
いまはまろうどおりのふびんをもうけて。
のみよ。
○ひめ姫ぎみ
ものごころもなくてかくるまにのんこと

ばいうぢこまかにてをきいまさらさうなくれば。
ぢいうぢよさそうにつやつやとかうもくすめ
ふさわうよさそうにつやつやとかうもくすめ
うれしやうれしやとおもふにぞ。まをさんかたもなし。
れかくちうづきをもつるおうぢ。孫ぢう
をとくとひきうけてそだてんとのこと。
いまはまろうどおりのふびんをもうけて。
のみよ。
○ひめ姫ぎみ
ものごころもなくてかくるまにのんこと

ばいうぢこまかにてをきいまさらさうなくれば。
ぢいうぢよさそうにつやつやとかうもくすめ
ふさわうよさそうにつやつやとかうもくすめ
うれしやうれしやとおもふにぞ。まをさんかたもなし。
れかくちうづきをもつるおうぢ。孫ぢう
をとくとひきうけてそだてんとのこと。
いまはまろうどおりのふびんをもうけて。
のみよ。
○ひめ姫ぎみ
ものごころもなくてかくるまにのんこと

ばいうぢこまかにてをきいまさらさうなくれば。
ぢいうぢよさそうにつやつやとかうもくすめ
ふさわうよさそうにつやつやとかうもくすめ
うれしやうれしやとおもふにぞ。まをさんかたもなし。
れかくちうづきをもつるおうぢ。孫ぢう
をとくとひきうけてそだてんとのこと。
いまはまろうどおりのふびんをもうけて。
のみよ。
○ひめ姫ぎみ
ものごころもなくてかくるまにのんこと

ばいうぢこまかにてをきいまさらさうなくれば。
ぢいうぢよさそうにつやつやとかうもくすめ
ふさわうよさそうにつやつやとかうもくすめ
うれしやうれしやとおもふにぞ。まをさんかたもなし。
れかくちうづきをもつるおうぢ。孫ぢう
をとくとひきうけてそだてんとのこと。
いまはまろうどおりのふびんをもうけて。
のみよ。
○ひめ姫ぎみ
ものごころもなくてかくるまにのんこと

ばいうぢこまかにてをきいまさらさうなくれば。
ぢいうぢよさそうにつやつやとかうもくすめ
ふさわうよさそうにつやつやとかうもくすめ
うれしやうれしやとおもふにぞ。まをさんかたもなし。
れかくちうづきをもつるおうぢ。孫ぢう
をとくとひきうけてそだてんとのこと。
いまはまろうどおりのふびんをもうけて。
のみよ。
○ひめ姫ぎみ
ものごころもなくてかくるまにのんこと

されく。なきなどハしなハぬ。さなこなて（紫上の事）ゆくぐこれ
まゐりなどしたまへど。ゆうく見めぐらして。たてぎこ
れ見てゐをもとめくらうたげに打ひろこまへハめ
のとめしいでゝなぐさめまきしはしなし。まふ
（日十二丁ウ）
○いかにぶひおこすらん。われなく、いうしう意しか
ほぬべきさまに。うちまもりけくふとこゝろにいまて。（紫上の姫君をかへ）
うつくしげなるゆ。ち紙くゝめまひつ。たちぶれゐなへる
ゆさま。こゝにおかかり。
（横笛五丁オ）
○わかぎこゝハめのとれもとに稱こまへりけるおきて
（葉君）

らいしハ。菓子などゐて器へ。

たむいぐまひく（源氏君のこ）ゆ袖をひきまつれなりまふさまい
ゆうたくし。
（日五丁ウ）
○おれたかうなれらいしに。何とも志るしたちよりて。いと
あはるゞしう。ぶりちしてくひかなぐりなどしまへ
（葉君のこ）
バ。（源氏君詞）あならうかりしやいとふぢんなり。かれとりかくせく
むりのよめとめまふとものいひさがなき女房も
しう。いひなせとくわらむまふ。
（日六丁ウ）
○ゆ遠れおひいづるに。くひあてむとくたかうなをつ
（葉君）
とにぎりりちく。志ぼくもよくと。くひぬしまハいと

孫ぢけるゑぶのこかるとく。
源氏君 うきふしもわすれずながら呉竹のこハすそがくきり
のまぶをけるとゐくハなちくのこまひかんだ。葉君
わらひて何ともおりひたらぶ。いとうぐうしうもひおり
さわぎまふ。
日 十六丁オ
○ちしまいぐまひて。大ねこう交いぶきなりく。自家のこうらのまゆん。ある
白君ん
たへねくおたせとこゝぞうらかしこまりく。いとおどけな
げまのこまへバうちわらひて。夕霧君 おいしませ。いかでうこすの
まへをバわらり待らん。いときゆうぐまんとて。いぶきた

てまつりくゐこまへバ。ひとも見ぶ。自家詞 まろうかハかくさん。
なかくとて。ゐン袖してさしかくしまへハ。いとうつくしうて。
ゐくなりまふ。六ならにも二ハ交ハ。葉君 ちりぎこと。こと
にまぶまくあうこまふを。源氏君のこ うつくしこておいしまゐなる
けり。すこハまのかどにおろしなりまふを。二ハ交見
つけまひて。まろも大ねにいぶうれむとのまへを。こ
ハ交。あが大ねをやとてひろへまつり。源氏君 流もゐらむじ
て。いゆこうぶりがいしきゐ。ありさまどもかな。おかやけの
ゐン ちらきまりゐ。わらくハ此を身につゆぶぜんあら

うひまゐよ。こゝはやうやういとさゞなくおいすれ。ゆま
さのうこまきかひ申ゆゑ。いさめきさいしあけうひを
まゐ。大将もわらひて二ぬらやいさいよなくこのうこん
に。ゆこころさりゆのくまゐ。ゆこころふかくなんおいまゐ
ゆる。ゆこしのみどよりいおうろしさまぐ見しさせ給
ふ。など。ゆかくまゐ。うち原こゝく。いづれをもいとうつくしと。
ふひきこてさせまつり。
日十七丁ウ
○大将ハさいきこゝを。まゝこえよくも見ぬかな。とおぼ
しくこゝのひまよりさし出こまつるよ。花の枝のう

もしくおちるゆゑ。夕房君のさ
ゆゑ。ゆゑ。見せまりくまゐきまへば。
里おいしたり。ふるあゐのなかしのかぎりゆきまひてい
こしうもろうむかりうけくしきこと。みこゝちよりも
さまりにおりしげまく。つぶくときよしなり。なまめ
まるこゝろもろむく見れば。やまなきゐなど。こまは
今すこしつよりかどあるさままさりたれど。まじ
れゆゑぢめおりしうかをかるけしきなどいとよくおか
何とりしく書の相手なく
ゑまつりくちつきのことさしよ。花ゆりなりさほて
うちゑこゝろなど。わがめのうちつけなるまやあらむ。

源氏君のゆゑ
おとゝかゝるゝびおがしよすんどいふくにけしきゆ
し。
清清丸イウ
○これらやいあまこれになりよいとおりげまくあり
きなふれにこちれひまはまへにすゑなりなひ
こく人のきりぬまよまろが侍らざらんにおがしいで
紫上の詞
なんやときこてなへいと恋しかりなん。まろはうちれ
白文の詞
うへよりもこやよりもけくをこゝろまさりて忘ひ安ゆれ。
紫上をさしてのすゑ
おいせびいてちむつかしかりなんとてやをすりまさらち
紫上のゝ
ちしまつるさすおりけれいかく忘ゑなりなこゝはお

ちぬ。紫上の詞
おとゝなりなひなが。おとゝまひこゝ。おのこ
いのまへなり。紅梅とさくらとは花の中をりくにこゝろ
ゆゝめくりてあるびなへ。さりべくんをりは。佛にもた
てまけりなへと。笑えなへはうちうなづきくにかかを
まりりくなるゝぶれおほべかめれがたちくおりぬ。
紅 サヒオ
○わりえのなゆゝちんに音たかゝるべきゝとなにわざ
白文
とせざせむとぱしまありきなふもおりしきにありさ
源氏君遁世の相にかしらはげん
まを見ざらむことよろけにおのびぐこし

離別

賢木 十一丁オ
いでゆかをまちたてまほしけるとく。八省をたてつくけるる
斎王の御なのん
いづし女ともれ。袖ぐちくもあひもめるれぬさそよ。ん
にくきけしきすれば。度上人ともわたくしれわまを
むおかかり。
源ナ 九丁ウ
○いづくあひわるなぐり。ゆしきまぐなきあつり。
口 源氏君の源ナなうつりすつくん
○ゆびんうきまゆとく。鏡聲まつり給へるを。面やせあるる
源氏君
かげれ吾れがらいとけてをおとらせれば。源氏君の詞
てるけれ。此氣のやうにや。せく侍る。ゆるさうなと宣へハ
紫上之
女君。涙をひとめうけて。見おせ給へるいと思ひがくし。

同ひはひ。おとゝの
此の音神は。家に見
さゝめて思ひる。

源氏君
身ハかくしくさすらへぬともきこうあくりさらぬ鏡の
かげハをるなりじと。はかしなへバ。
紫上
別くもかげごよとまる物なりバかごとを見てもなぐ
さめてまし。いふともなくて。柱がくれなりかくれくなるこ
ゆまざらハしなつるさ下なれさいらしるなりまたぐ
ひなりけりとおぼしたるしをとれはあきをなり。
口 十三丁ウ
○ 多もしぶくなけバ。よまつこえく。いろぎいで給へ。
まいの月れいをもけるれどよろへらまくゝ給なり
女きこれこきはぶようつりて。けよやるくがれなれバ。

無題
月げの中ゆどりる袖ハせだくともとめくもんだや
あらぬひとりぬ。
□廿一十よ
○月ハ女ごころにハねぐらのどうきさしくしと
あひて例のあ枝ふかく出るよかりけりだまどたびの
ハまうひいとくゆ川しあひて月いでくけりなかれ
すらいてたゞおくるおくりあへうしいるゆめぬきさと
おかくつりるけりとのこおぼしむずん一日二日を
まきるへぶきるをりぶるあやしういぶせきこちす
るりの袋とくこすまきあげくたしのうるいざるも

源氏
月いでくけりなかれ

雲上
ぬしあ女ごころきしぼこるへるたやしひくぬさ
月いでぐるへる月げよいこうおりしげまくぬるへり。
わが身かくくちるるき世ハわれるばいうるすきまま
さすらへたまちむとうしろめたくかるしけれどおぼし
いまだろがいとゞしかるべけれハ。
源氏
いける世ハわるも袋ちぐちぎりついのちを人
にうきりけるうるちるしるどあさちるよゆえなりと
まへハ。
雲上
袋しらぬ命まへくゆれまへの別をしゞしとゞ

めてしがな。けよさぞおぼさるらんといと見すぐがを（源氏君の心）
けれどあけをてなばはしたなるべきにより。いそぎ出
まひぬ。
口 ○ゆかしけまゐりて。忍ひ給ふしこの洞うぐ。
（口十六丁ウ）
れさうづきのうちとりろこ忍ぶすしまふ。
口 ○日ゆうくさしあがりて。こころあわてしければ。
（口十七丁ウ）
（以本ねえ）
へ見のこしはくいでまふ。弐見おくりまふ。家をいと
なかくなり。
（明石 卅七丁オ）
○おりひれやうにかなしきこちにいでたちまひしう
（源氏君の心）

ぐ。つひにハゆきめぐりきなんと。かつハおぼしなぐさめ
き。おのらびのうましきかくれ。ぬいてこちれまうやは
（明石より却へうへ見まゐらんとの口いでこまんの）
かつり見るべきとおやぼよく衣なり。
（松風 七丁オ）
○見捨がら絶をまれさまをまこへえしもかつしぐかし
ぐ。よすがなうなうへて。袖ぬれがちなり。
口 ○わがぬ。いともくうはくしげよ。よるひかりけん
（七丁ウ）
（明石入道の心）
れこてちして。袖よりかうにをなちゆくざりはるを見
なれてまいりしなつるころざるなどゆくしきまぐ
かくひとまたがつるこをいまくしく心ひなぐらくとき

見まゝでハいうぐうすぐさむとすんとつゝあへび。
入ゐ
紆さ紀をまゝゝまゝのるわかれ語ゝたゝぬハおいの
なゝぐゝなりけり。
吉木柱廿一丁オ
○つゐまゝゝゐまゝゐひむがしおりくのりしらを人ゝ
ゆぞうゝちしまゝもあれまゝ姫ぎゝひぞゝいろ
れうゝかさゐ。たゞいさゝうにうきゝくちしられひゐれ
るえざゝにうゝがいのさ紀しく却いまゐ。
桂柱
今ハとくやどるまゐともなれさ汚るまきれ柱ハ
われをとすゐ。

ほ・みゑのゆゝへ
紆ゐまひし杓
のゝし。

口廿一丁ウ
○ゐまへまゐひとくもさまくまかなしくさしもおも
えぬ木くされりとさへさひしうしんさとめとゞめく
はますゝをあつり。
円廿二丁オ
○ゐくるまひきいでゝうちかつり見るもまゝハいうぐうハ
見むとゝちゝなき桂をもめとゞめくかくるゝまゝぐうかつり
こゝなひける。
桂柱五丁ウ
○うちにもなく春くのこゝしくめれとなるべしあゞきこ
円あゝさくん
やいづくゝゝおりしまゐるかつりまへむなしきゝゝをゞ
に見まゝぬゞかひなくかなしくもあゝれ見れこた

てまけりくもあらずおぼしまひいつしかひある街ン
さまゝ成見なるむとあしこゆふべにこのこゝ寄て待る
にこゝろいのちものび待つれうちすくまひてかく
ゆくへもしらせまをぬことおほうこゝもあぶ兎をばえ
領 らうしなしじ元とのいこしくをしむひとをバ帝いい
釈 しやくともかへしまふまりあがきこゝをやうなりこ
らむひとまれおまくまま かへしなまきまきゆゑ
らをも見なるむといひつくるゝ（ゆゑ）おろえぬことぞ
まじるをあやしとおりひくゝ

口 七十ウ
○さらはいたむこゝもなくめれまへになくなしたら
（は母は母の代）
むろましさいいこしくともよれつゆまくたらひあら
おとなりされハいうは志けることぞとまどふかること
ぶともれまざれありていこしうりのおりひまむけ
らむともしらねバ身成なげまつんともおりひも
ようぶ鬼やくひつゝむきつゆめくりれややうも
ていぬらんむうしねぶらみあやしきりの事れ
やひまうさゆうなることもいふなりしとおりひい
げざくハかれおろろしと（女二文也）ふひきこゆうあらうに

さらなどあしきゆめのとやうのりれやうむう
へまゐへしとはかくめざましがりくだぢりたる人
りやあらむとげするどをうくぶひ〻〻

旅

源ナサ二丁オ
かりうめれこちにくもかる旅をまゐひまゐぬこ
源氏君の
こちよんぼうさもおりしさもめづらうなり。
口上
○おかしどのといひける所をいこくあれて松ばり
ぶ志ましなりける。
源氏君
かゝ里まゐをのこしける人よりもゆゑへ志られぬ

いとじくて御方の。
手ぬまゐ見ゆるも。
ゆゑ浴ぶ。

すまひをやせん。
口サ二丁ウ
○ゐ化さてまゐるなりこれかゝりつるを見まひて。浦
源氏君のゝ
やましくもとうちずむしまつるさらか世れふること
まれどもめぞらしくきてまされかましとのこゆとも
れをとぐおもつり。
口上
○うちかつり見まつるまゐしりこれ山ハうすこそる
うまくまことに三千里の外れこちするまゐの
志げくもたへぶこし。
口サ四丁オ
○ゐがあめれころになりて。京れことともおかしや

らるに。恋しきひとおかく女ぎこれおがしたりし
さてしまえ此ことわらぎこれまごころもなく
まさぎれまひしなどはちじめいくりこおりひやと
ゆくしまし。
○おのくふるさとよこころがうげまうことはくす
べうめり。

海路

日まうきこころなれバおひ風さへうひくまごさる
れときばうりよかれうらまつきまひぬ。

○とうつくしうたぐいまうらけごうくきこうらなる
ほさるはことなる志はらひなきこ無まのせくこぎ
いぼるわどいいとこ家まなんおがくけるおさまきさ
うちにたぎこれわすれずなりくまたれはりと
へいくうとかうひまつけくなこごたゆるときなく
むすめどもおりひこうるをふなこちゆくしとか
川ハいさめけりおりしろきにこれ見はこころわ
ううおハせしりのをかくるこちをも見せなるりの
にもうれおもせまうらバまれらハくてうぎこはしと

ゆきしるとおもふのこゝ

あのこの事ぞこと
あくばかりしかり事

こゝ京はうこおりひやうにかへる浪もうらやましく
こゝろはぞきまゝ母子とも此あらくしき寄にて
うらがなしくもかなわくきこまけるうなとうこゝみを受
まうにふくうさしむうひとなきけり。
婦女 母人も誰をあふとおかしこれうらがなしげ
に寄れ受ゆる。
あてはかなこと きしうこもゆくへもしらぬ沖にいでゝあれはいつく
よ君を慈しむ。
十四丁オ
○かくまげめるうしおのげうらいひ出つゝへバまけじ

のびく。毎の時
ゐるどのなん。

おしむにいくおひ（監のおひきれんうちふん）さなんとおりふまこゝろもまどひて。
たやふまといひくさまことになんうまへたりけれバ思
ふうれ風さへすこゝくあゆうきまぐちしまのが
まぬ。むぐきのなごもなくこゝかますぎぬ。海絨のふ
稱まやあんちむさ紀毎れかぶやうにくくるな
どいふりのあり。海絨のひくふるなんようもかの
おうろしきひとのおむくるにやとおりふませんうな
し。
うきことまむものこさわく むぐきまハひぐきれ灘

もさわらぎりけり。かたじけといふところちりづきぬ
といつまですぎしいきいづるこゝちするまいのふなこ
がらもかゝとまりより。かたじけおほかどをとうふ
こゝ忘れなさけなきもこゝ初よきあゆ。

行路

梧桐十八丁オ
山が川のおどろくもうるさしかゝくずゐじんのおと
もせさせなるをぼ。志ぞのまがき代わけ侍ゝ。そこけり
がくなき水のながれども代。ふゝ志ぐく酌のあしおとも
なかれ志のむてとよろいしなつるよ。かくれなさ川自

ひぞ風にしたがひてぬし志ぬまとおどろくわき
あれ家ゝぞありけり。

椎本サ三丁オ
○ぬつりしハこたゝ山のかどもなりよにいとおろ色
げなれどさゆうのおちすましこをやえり出給ひ
けむ。笠つりげなるさゝのくまをさゝひきとゞむるか
がゝもなくうちたやゝかゝと此にまゐりつきぬ。

東屋六十一丁オ
○ゑどもなうあけぬるこゝちするなかうなどハなり
でおかちしうきにはおかどのうゝ忘していかにとう
ゆうりしらぬなのりかしてわむれて行などうきこ

ゆるゆるれ釣がらけは見れば月のいでぬきたるものの
れおよのゆうなるぞかしときてあしもかゝるよもぎ
のまろねまるひまをぬこちよおりしうもあけり
小のあひともに門あけくいぢるおとしおのくいはて
ふしなどする程きてあひく人めしく車つまどよよ
せさ弊給はかきいぢきくのせあひた
（法丹さん）
口六十二丁オ
○きこもれる人にくうるぬどうれけしきまつけく
（蓋君もれ見るに事兵法丹あん）
もきしあれ悲しさまきうく山ふくいるまるまきる
たちわるこちしあふうちすがあくよりぬあへか

神れかさなりながら、すがやすく、いでうりけるが汙ぎうま
ぬまくれ、ぬるれ紅ふまれ（白ふまのん）すれしの花れおどろく
しうく汙りたるを、おしうけれたるきぬまこれけて
むきいまあふ。
（蓋君）
かこごと見るまつけくもあさ雪れとろせきま
ぐめるく神れれ。といろにもあらぬひとりぶちあふ
れきてく。
（法丹廿六丁ウ）
○此れ五位二人あんぬ（白ふまのん）るれくちまへさふうひけるさ
うしき山おしまきてぐおのくるまへのる汙れ雨を

ふこなるゝ。るはあしおとさへ。ふがうくりはがなしむう
しもおれこちよのこころハかるふぞこそおもひ
うば。あやしうりけり里はちぎりうれとおがん。

病

相つか七丁オ
一つのうなきうにきていりけり。りのしまふ成。
口上
○まこなどもいとたゆげまくわれうれけしきにてふ
したれバ。
美 四丁ウ 美上結姫の口ふちゑん
○ふぐるしきさこれ口こゝちよまやこまひく。相こゝろ
ぶうげよおがいこう。

紫上のとづこゝを世
ゆゑ目ぐのくるし

口ふ廿五丁ウ
○うちに御くすりはことありて。世の中さまぐに
主上口悩のくるし
はしる。
美 紫上廿九丁ウ
○つるしは院ハ。けふは雪よいとゞ口ふ風くはうまく
かきこゞりなやましくおがさるれど。女三ゑん
ゆのしさぶめ法る成。ふやまくおがしけり。
口 卅六丁ウ
○朱雀院は御くすりはことなかたひらきまく
みそぬよりがく人などハめさぬ。
口下 五十二丁ウ
○ひこう内などこゝるこにまゐらせたれど口ふんもいれぞ
源氏言のし
日一日うひおいしくよろ川は見なりなげきなまふ

ちゝなきゆくくるものをぞよいとものうくしゐ起く。
おきつゐりゐしゐとたゝく日はへぬ。
口 七十七丁オ
○女きてこハあつくむけしとくゆぐしすまして。すこ
紫上
しきハやうよりてなしゐつりふしゐぐこうちやるゐへ
ゐしうバ。とこにもかけるほと。雲ぢうちふくみ
まゝふすぢもなくいときまゝにゆくとしく。
をこおとろへゐつるしもくハさをましろくうつく
しげよすきたるゆうよ見ゆるはさつきなど世まな
くらうしげまりゐ。ぬけるむしれうるとれゆうよ

まぶいとたゞよいしげよおもひ。
口 七十七丁ウ
○池ハいとすごしげまく。蓋れ花さ絶わるれるよ。菜
はいとつゐをやうまく。雲ゐきらくと。玉れゆうよ見て
わらる紙かも見ゐへ。おのれ起とりもすしげゐ倍
うれ。とのこまふよおきつゐりくゝ見いぐしゐつるも。
いとめづらしけれバ。かくゝ見てまつるゝう。愛れ出
こちすれいこゞくわゞ身さへかきりとおかゆるをりく
のつりしをや。と洞紙うけくのゐへば。紫上こはうるもつ
をれとおもひしく。

けくふしまつり。おましはあらりのきまげよ。けさひ
ううぞしうんにくらずすこまへるうちとはま
がら用こそありと見ゆ。おりくわずひる人ハおの
ぞうら髮ひげもこゝ。まのむつうしきけさひもうふ
わざまかれ。やせさらむひるしもいよくしろうあく
ちうまりけしく。枕ひうげぐそくのまどきこゝまふ
けさひいとよわげよ。いきもなくはくあさはげまり。
夕房廿三丁オ
○ありけのゝがりるこゝちすと。おしくぐきせた
まふ。

日 廿四丁ウ
○いとみぐりがいく侍まいるこゝせまゝもむぐるしう
日良和尚
まんこのふつかこ日ばかり見なくさりけるぞとの。
月れこゝちするもうつハいとちるまくまむのちうまう
○末世の毎ことにまこ
ずしも。萬面の侍るべきにも侍らざめり。又めぐりま
ゐるともかひやハ侍るべき。おりへいで時れまゝへぐで
里ぬべき世中ハあるがちよまるゝひ侍けるもくや
きまぐまんなどまきまふ。
日侍二丁オ 紫さん
○こづうれにこゝちまハ出れ世まこのうねことまくらし
ろめる紀ぞしだままじらねに身まぐまいるまうち

にかけとぐめまれしき。ゆゑ命也もおがさまぬ紙。とし
ごろ此ゆゑちぎりかけたれ。ふひなげかせなくむこと
のこゝろ人志まぬ紙こころ此うちまりのくあまれまお
がさしけれ。
口 十丁ウ
○秋まちつけく世中すこし涼しくなりて。ハ紙こ
こちもいさこのさハやぐやうなれどなかともすれば。ゆゑこと
がましさるハ身にしむばかり。おがさるべき秋風なる
稱ど。おのけきをりがちまくすぐしなふ。
口 十一丁ウ
○風すゞて吹出るゆふ雲にせんざい見なふとく

けうりくまりゐまへる紙。読まりなひて見なり
なひくけふハいとまくおきゐまふやるハ。おれおまへまく
はこまなく紙こころもれくしげなりうしと冥く
なふがばかりはひまたりをもいとうれしとふひきあえ
たまへる紙けしき紙見なふもふぐるしく。法ひまいうま
見しさわがむとおりふまあれなまバ。
紫ゝ
おくと見るなどぐたるきとりすれバ風まみぐるく
萩のこ法由げまぐをれかへり。やまるべうもあるぬま
うへらまたるをりきへ志のひぐらさき紙

源氏君
やくりせばきしあらうふ春の世よおくれさきぐれ
かどへずもがなとくれ洞をたちひあへぬいぬ。
巾文
杜風よしばしとまらぬ春のうを誰か草紫れ
うへとのこ見むと宵しかりしよ
総角七十三丁オ
○ゆふくれのうらの宰さいとすぐしぐれく木の
しる吹折る風のまるどたとへむるなくきしる行
きさおりひつぐけられくうひぶしまへるきまあてる
○宮法の大君
かぎりなく見てまふ白きはうまうこハけつることもし
給ちぐかどへぬまどまうふすぢなくうちゆゑまこ

河原法へ。夕魚を
あくおりせし起家
を見ぬの事が聞
されしそのなる

こく日ほすこしあをこまへるもなまめかしさまさり
てすぐめいぐしまへるまこひしむつきれかどもしらん
人ほ見せまかし。

物怪

夕魚廿六丁オ
よひすぐるかどにすこし稼いりまへるに。源氏君のこ
にいとおしげする女ぬぐおのがいとやぐたしと見なる
をいたづきもおもわさぐかくことなることなきひとを
ぬくおりしくときめしまふこういとめざましく法
らけれとくこれはうさいうの人をかきおこさむとし

まれを同じきも

と見まふりのまおろいてこちしく。おどろきまれ（源氏若紫）
ば。空もきこえはけり。うたくおがさるれば。ほとちをひき
ぬきくうち。重ねひく。右手をおこしまふこまもお
そろしとおもひるさまにくまゐりまり。
口 廿七丁オ
○ましれつまどよいでぐ。戸をおしあけまへまば。わらど
のく空もきこえはけり。風すこしうち吹くるに人はす
くなくくさふふ。ぬぎりを祈てり。
口 廿八丁ウ
○ しろくもくまゐまり。右手もうごくべきさまにも
あらねばちらき（ミ）に本帳をひきよせくなれもくまゐ

まとのまふ例なるぬことまく。おまへちらくえまゐらぬ。
つくましきまなけしまもこのわらびなかりくこや。とこ（源氏若紫）
ろにしらびひてしろとてゆしませく。見てまへばたぐ此
まくらがこまに夏に見て待るかたちしたる女。おりらげに（川島亜）
見てくふとおくうせぬ。
口 廿一丁オ
○ 空はれのうまぐてきくりやれきはまくたる。屋
風のうえてかしこれくまぐしく見てまゐまりのくあ
しおとひしくとふこなしに待ぐうしろより雲のくあ
こちに。

○夏十七丁ウ 大度まハ。ゆりのくけつくおこりくいこしうわづひ
なふ。あれはいきすぐまぶちくおとぐれは(コラタ)昊などいふもの
ありと。六条は身示のも 咲なふまつけく。おがしつぐくれば。身ひとつ。はき
なげきよりかりよ。人をあしなきなどおりふ。心もなけれど。
相おりふまなくがるなるまひハさりやあんとおが
しきくることもなり。
口 十八丁オ
○すこしもうちまどろこなふ。夏にハ。かれ姫(夏にも)きこ。
六条は身示のも
おがしきひとれどきよくにくあるところまいきく。
ゆくくひきまさぐりうはくまも似ぬ。なけくいうきひ

たふることろいできく。うちかなぐるなどと見て。
ことふびかきなりよけり。
口 廿丁ウ 夏にはものくけのうつりくいつてとはく
○いでつくぞや。身れうへれいとくるしき紙。おぼし
やすめなへときこてむとくるひ。かくまゐりあんとも。
きくまゐ紙。りのおりふひとれ。むしひハげまな
くがるくりのよなん。なりけるとなつかしげよいむく。
なげきわびうくまみぐるくわぐくまゐ紙むすびとぐや
よしくひのつさ。ゆのくまふくしあけさひ。うれひと
にもなりぬ。なはりあつり。

○ロ 廿五丁オ
ゆくのくうちぐ人ずくるましめやうるるかどよにたる
に例れ[illegible]
まふうちよ[illegible]
いりあひぬ。
○いうしき[illegible]
源氏君の[illegible]
こゝろさしよおこれいでぬりのけちひさき
[illegible]
いきぬ[illegible]
うるいうしくてうぜ[illegible]
[illegible]
源氏君

○卅二

[illegible]
させ[illegible]
らせ[illegible]
[illegible]
こゝろかくいうしき身をうけ[illegible]
のこりてこゝろかくまぐもしきたるれば[illegible]
れ[illegible]
ることぞ[illegible]
をふりかけ[illegible]

れけのさまと見えたりあきましくむくつけしや。
おがしきこゝしてとれかけらぬもゆくしければ。おれ
ゑらいれ自然とへくひきすゑてさまかしくもせ
させゐいぶ。まことにうれ人かよくぬきつゐるぞ
いふするものゝたふまてるかなき人れおりてふ勢
なることいひ出るものゝなるをたしかなるなけりせ
よ。まこひとれもちぎらむさとれ。心まもるくおひ出
られぬべからんをいへさてくるむいさてうまてもしん
ずべきとのこまへバ。（抽怪のも）かろくといてくるさく。

（抽怪物）わり身こうあらぬさてるれうまながらうらおが
きするきこえはおこなりいとつらしくとなきさけぬ
ものうらさすがよりのをぢしたるけをひかけらぶ。中
なかいとうとましくぶうけれバ（源氏君のこ）のいをせじとおがぶ。
（抽のけの紹杉女中ゑん）中ゑれ出ことふくもいとうましくかくじけると
なむ。あまかけりくも見なれどこゝちことなりぬ
まば。子れうへまぐもふかくおがしぬるやこのらむ。
なか身ばらつらしとふひ寄くしぶれ（執）もふな
むとまるものなりけるうれなるもいきてれま。

人よりおとしておがしすてしまうも。ふみどちは。
りのぐうれついぐよむようぐにふくりしかりきま
を。めさまひいでうりしるむいとうらめしく。今ハこで
るきるおがしゆるしてことひとれいひおとしめむ我
だよ。たづきかくしまへどこうおりへどうちおりひ
だうりよ。かくいうしきゞ身れけたひるれバかくところ
せきるりされ人をふかくにくしとおりひ冥ゆることハ
まけれど。まりりつくいと。ゆうりやうきこうしき
くえちうづきまわらぐ。ゆうをぐまかけるまん

きく侍るよしいまハされつゝかろむだうりれわざ我
せさせまへずかうど經やのくしることも身はハくる
くわびしきかのほとれこまけたれくさるまたふ
とさこともさまくねいとうるしくなむ。中文にも
はしよしを侍るへきこしまへ。ゆめゆこうやげうへのかどる
人ときしろひうほむむつうひまゆる。無文はおりし
ましくころわひれゆつくうろむべうるむくがくろ
さと我。かまうぐせさせまへいとくやしきことまるむ
まけるなどいひつゞくれどりのくけはむうひて。れ

がくりしたるをもむもかくいらいけれバふしごとめく。
うへをバ又ぬとゆゑ思ひくらしなり給へ。
○ぬれ[illegible]せよ[illegible]ひとりしあきりとおすじゆうする
いまひとりなるごとれつるふかつきぐしきかどれ下
らう法師よ[illegible]ともさせて人もよらぬうしろのう
しまいきてりのかと見ゆる本れしら紙うとまし
げれなりやと見入るよ志ろきものくひろごりた
るが見ゆるかれハなまぞと立とまりて火をつかく
すしく見れバものくわるすぐこなりきつゆれ変

化したるがにくし見あらハさむとてひとりハそすにし
つゆこそるいまひとりハつるよりれよりぬものなん
といひくさゆうれのの志ぞくべきわんつくり法さすが
になかまりかしられ髪あらバふとりぬべきこちに
るよ。ぬれ[illegible]とりしる大徳。たぐりもなくつゆなき
きまるくちかくよりてかれさる紙見れバかこハなぐく
つやくとしく大きなる本れ根のいとつかくしきこ
によりぬくいうしうなく。
口六丁オ
○鬼う神かさつゆかこるまりかぢりれ天れしの

けんざのおいしまひはいえかくれ奉じまのりまへく
ときぬをとうくひけばうわをひきいまくいまくなく。
法師の詞
いでいかれさぐるれこうまのおよやまさまかれるむ
やといひけく。うわをみんとするまむりしかりけんやも
ちまもなりけるめおまてやいらんとむくつけきをこ
のりしうぶきさう紙。人はみせんとおりひくきぬを
ひきぬがぜんとすれバうつぶして。ふらんだりなく。
口六ーウ
かくくおいてバ。志はたて行りぬべし。かきれりとは
法師詞
こういぐきめといふ。僧都まことれひとのうちなり。

うれいのちたらぬを。みるくすてむことハいうしきこ
となり。池はおよぐいを。山はなく麻をぐるは人はとう
へらまさく。志なんとする紙ニ法ぐたすけざらむはいと
うるしかるべし。人れいのちひさしからましきものなれど。
のこりれいのち一二日をもをしまぬバあるべからぬ。鬼も
神はもつ領ゆうぜられ。人はおもれひとはたりぶられて
もおれよこさきれしは紙すべき物はこうあめれ。仏
れるならぬすくひまべきおはなり。粗こころこは志
ぢし由をのませなどしてたすけこころこんつひは

しぬべくぐ。いかきうまつらぐとのあひくさ此大絃
しるくいぐさいまさせあ此でしともたいぐしきわぎ
うるいくうわづらひあ此人此所あるよ。よくぬ物
をとりいまさくけがらひかるらぐ出きるんとぐとも
がくりあり。
○ 十五丁ウ
つりし世此と思ひいづまどすえけむ而。これといひ
しひとくだよだしうまたがくしうもおわらぐ。でわれ
ハうぎりとくく。身をあげし人ぞかし。いづくまきまける
にうとぜめくおりひいづまバいといみしとものを忘

るげきくくうるひと此孫ありしまつまぐ此たるちて
おるりしま。風たげしうの波もあらうきこしをひ
ゆり物おろろしうりしがぼきしくゆくさ此もおぐ
えぐ。すのこ此たしまあしをさしおろしるがらいくべき
かくもまどたれくかつりいむもるうぐらまくこころ
ぼくさ此よまうせるんとふひくるし此おこがまし
うくく人に見つけくまむよりハ鬼もるまもくひく
うしるひてまといむつ。ぼくぐとおくりし此いとき
よげるる男此よりきくいざまへおのがりとへといむて。

天人などのやうに、此人のうせたハと、何やうきこゆるちすまとも。

やうにおもふも。あやうさこゝちすまど。などうにとふらく
かぞりいみしく。ふひ宮ゐるに。ゐんをくそくたまふ。
いづくまふれと宮しひとのさるところにハいかぐおハ
せしぞと。せめくとふ。ひとたづりと。ふひとくあや
かりしかどに。これわすれるにやあらむ。つりけむさ
まなども。さてこにおぼし侍らぬ。なぐ不のるおもひ
いぼることくそれ。たゞいかぐ此世にのしじとおもひつ。
ゆゞまでとにちしちかくくながめしかどにまへちう
くおかきなる本れつりしあらこより。人れ出きくね

相臺文衣の母女ありけるなり

くいくこゝちなむせし。ぞれよりかかれとハわれなぐら
誰ともえおもひおもひまき侍らぬといとらうたげにい
ひなしく。世中になかつりけりといかぐひとにあらまし
じ。きこしくる人もあらバいというしうこゝろとくない
たまふ。

衣傷

相つれハ丁夕
ハぎりかぎりのれば。きいれさかうにをきめなる紙たくさる
れうこ。おなじけぬりにものがりなんとなさおぼまし給
ひて。ゐおくりれ女房れくるまにあらひれりなひて

○文衣の母老

八く出て所よ來ぬ
時まうへ至むの
やまんがくまず。

おもきとりむ所まで。いかしうろぬさうむくるよ
むりつきあるこうち。いうばかりかをありけんむあき
れいうらく紙子なくあるおいするりのとおりふかいとかひる
けしばかをひよあるりまいも紙子。ふくまはりくばいまハ
あまき人とむろふうよふひあるりまむとさうしうのくま
むつまどくるまよりおちねべうまどひあへバさはお
りひつうしと人くめくわづうひきるるうちより位に
侍るひかり。三位のくらわおくるまかうし勅使きて。
うれ宣命よむあんうるまきとありける。女御と

ずまいまで見るわかがつうたくちそうおおやかさうるきハ。
いるひときざるみくるめぞぶまとおくるせまふまりけり。
○口 九イウ
生ずまあずまひちくおくくきせ由へバ月みぞそま
侍るひときく家けさ秋まり。
○口 十六イウ 相つれの文夜の奏り初めの時のあさんへ
ごろむしはずめし。食月めとさへみきのつありろ
川よおがつげけまく時めまもおがつろまうし
我かくくも月日ハつまけのとかきまうおがやさる。
○口 十八イウ
月もいつまで。
○ 相つれの夢
雲みうへもあるぶまくくく秋の月いつぐすむん

[illegible]

何きぢふれ宿。おがしやまつて。やりし火ばかりげつくし
くおきたちしまひ。右をれつかきのとれぬ中の事
きこゆるハらしまりゆるまるべし。
口上
○人めをおがしくこるれおとゞまいらせまひくもま
どろませまふとうらし。何しまおきさせまふとく
も。何くるもしらぐと。おがしいぞふも。粗あさまろり
ごとはおこらせまぬべかりし。
口十九丁オ
○りれまどもきこしめさぐ。何きがきゐれけしきバ
うりふれさせまひて大床(タイシヤウシ)ゐれ[illegible]りのまどハいとハ

るまおがしめしられバ。たいぜんまさふ[illegible]ぎりは。
心ぐるしきにけしきゐ。見てそまろりまげく。
夕奥廿九丁ウ
○さこうむつまがりまへど。わりきにこてちまく。云
源氏君のこ
かひまくなりゆるを。見まふまやるうさまてつと
夕奥のこと
いぶこさくあがきこいきゐまへ。いといこしきめれ
源氏君の詞
見せまひうど。れまへどひえいりまふれバけたひも
のうとくまりゆく。
口廿丁ウ
○りのくまふゆうまれど。むほハふうがりく。此人
をむましくしましてむことれ。いこしくおがさるうれ

うへく。おかゝるれむくしきたとへむかるし。夜
中もすぎまけむかし。風のやあらくしう吹たる
はましく。松はひどき木ふかく宿とく。けしきのる
鳥れ。かゝゝ風になきたるもふくろうはまきるや
ぞおかゞ田。
○口 世四丁オ 伊 伊 悵のうちまいつまひく。むまをおさへて思
ふまいといふけれバ。などそのりうひくゆかざりつ
らむいきかつりまうむときいかるるさいちせん。見に
てくいきつまるまけりと。つくやおもはむとんまど

ひれまうふもおかゞにまいむませきあぐまこと思
まふ。
○口 世八丁オ 十七日の月さしあくかゝれなど。ゆさ池の火も
かれかるまよとりべ。かれかるまどこやまたるなどな
ぞ。掬むつしきもなまとも見て給はれ。きこと
だるこゝちしまゐて。おりしつきぬ。
○口 上 何くりきへすこきまいるやれかゝいとまたうそく
おこまへる何まれすまひいとく衣まり。こゝのりれか
げかれかますさくしゆ。うれやまハ女ひとりまく

こゝ忍のうして。此れかゝる法師ばられ二三人ものがたりしけり。わざとれこゝ忍こそぬと忍仏がいふ。ちでられ（初夜）そやもみなおこるひまてゝいとしめやかなり。清こゞれかゝこゞひかりおわく見えて。記とれけれ記も志げかりける。

○（口ハ十四）いまたまへまゞ火とりうむけく。右をハ屏風へだてゝふしまりいかなわ記しうむと見ゆふおろろ（源氏君のこと）しきけもおぼしぼいとらうたげなるさまして。まぶいさゝかはまゝろなるしまゝろまゝ。我とこへて我よ（源氏君有）

しゝ記とうびこゝ忍をぶこゝ寄せこまへいかなるむかしれちぎりにかありけん。志ばしれおどよ。忍代津くしゝ衣ほおぼしをうちすてゝまどいしゆゝがいしきおとゝこ忍もをしまぶなきゆゝとうざりなし。

○（口十丁オ）ゝかりしなぶらうちふしたりけるさま。うちかはしたまつりしがわがくれなゐれ（ゆゝ）がきこゝきたりけるなど。いかなりけんちぎりにかと。こちすがらおぼさる。

○（口十七オ）ろゝれうちくりて風ひやゝかなるよいといふ打ながめなむ記く。

源氏君 見し人のけはひ雲とすがむまでハ[illegible]ぬべのけはひも
むつまじきかれ。とひとりまちまへどえさしいらへもさ
ましこぼ。
口 五十丁ウ 源氏君の仏。四十九日とハたゞしひ本まゝたゞよりすくし
○ 此かどまくハ寺ぐらゝなるかいづまれこちらまさぶ
まりくおりむくらむと。おりかしやるとつく。孫んずをい
ぬこ夜ましまふ。
美 廿六丁ウ
○ とりべ野まゐくたてまつるかど。いこしげすることお
かりまゐるこうまれ。ひとぐも。寺ぐれ念仏
れ僧などうこうひろさ雅まゐもすし。

美之の華道の
さ法也

口 廿六丁ウ
○ 私もすがらいこしうけくしりけるぎしきなれと。いと
もたりなきひかげ[illegible]たりけるこうまくく。晩ふかく
かつりまゐ。
口 廿七丁オ
○ 八月廿余日。此つりの日なれバ。ろうれけしきもの[illegible]
すくなうらぬに。おとぐれやこまくまとひまへるさま
を見ゆるも。ことわりまいこしけまバ。ろうれくこまがめる
まゐひく。
源氏君 のがりゆるけかりハうまとわり[illegible]どもまへくくりゐ
れあそれまゐられ。

□ 世四丁ウ
○ 文ハ吹風まつけてゝは。来れたりげよりろきは
[illegible]
あらぶいましくとりつゝへるなれば。
大文
いまも見えくるかく袖紙くぶしうなりきかあれな
しやまとなぐしこ。
□ 四十二丁ウ
○ おまへなるをとるくしき人などいとうすくさ
とうちなきたるうぶろさむきゆふべれけしきなり。
賢木 十四丁ウ
○ おけまれ此日なまばおかれこれよの中とぢむる
相[illegible]七ヽ目
うられけしきまつけてもましてはるゝなるさ中文
れ[illegible]ころれうちなり。

冥[illegible]五丁ウ
○ かるなどよ。此ひさちれこゝだいのはりなやなや
ましうれうして。掬こころがうりければ。などもまたくお
[illegible]
れさこれ[illegible]ことゝ紙のこゝいひおきてくよろ川のことなぐ
この[illegible]ころよれこゝまうせくわぐつりはる世よかいこで。
つうまつ[illegible]とのこゝ明くれいひけり。女ぎこゝころう
きすくせつりくさ[illegible]人まさへおくまきく。いうするさま
にたぶ[illegible]まどふべきにかつらむとおりひなげきなゝ
をりんなよ。人命れかざりつる掬なまばをしこゝ心ぐむべ
きうるしいうぐ此人れ[illegible]あよのこしおく[illegible]

ひもがな。わがなどもいろいろもしらぬをとうしろめたこ
うかなしきことにいひおりへどしらぬにえとぐめぬも
けまくうせぬ。
○殿上人などなべてひとつきにくろうわらくも
のくまへなきまいけくまなり。
口上
○二条院の御前のさくらはばらむばくも花の
えむけをりなどおがしいぞ。おとしだりけとひとりご
ちあひく。人のことがめつべけまいバ江孫んずごうに
さりのあひく。日ひとむなきくらしまふ。夕日を

やうにさして。ふぎはのこずあつらはなるに雲のうに
くわらかるがまびきまりへ。なまごとにも御めとゞまら
ぬころなれど。いやものゝ夜におがさる。
源氏君
入日さに峯にしるびくうすゞハりのおりふ神に
いろやまがへる人きりぬにるれバうひなし。
○女房にもつひにえ男面し同じ者ままもぐ。沫
柳本 廿六丁ウ
為兼家人
けきいるゆうにくうせぬ。
柳本
口
○一条の家にはましておがつるくて。わるきなひに
しうらみさへうへて。日ごろふるまゝにひろきえ物

人げすくなうむかうげまくむらしくつうひなりしたまひし人ハなかまわりとふらひきこゑ出れこゑひし鷹うまなどうけるこの所づりだもこゑつくとしろなうおりひうむじくかすゝ出入成見なかもこゝまふれくと衣ハつきぬものなるんがりけるかくつかひなひし所でうどぜもつきなひし琵琶和琴などれ結もとりたるちやたさまてく孫をうてぬもいとうりれいさきわざなりや。

口 世ヒイウ
○ 所 おれ 本立いうけがりく花れとさ成わすれ
一 条天のさまく

ぬけしさなるをながめたくものがなしくさふらぬ人とも。まひ見まやつきたく。さびしうつきくなるつゝ。さ化たるやうにおふ書しくこゝにとまりわる人がり。あれ書。故とのくがけもひとうちわすきてく無。おりひつきとくなくもなり大将度れおりしなるなりけり。

口 世ハイウ
○ おまへちうき様れいとおりしろきに。式としだうりハ
一 条天のさまく
とうちおがゆるも。まくしきすぢなりけれバあひ見むとハとくらずさびく。

まさ無又、花の事ハ所りれかど所のもれ。金ありけるを。

夕旁
時しつゝまばらなるゆきのあは旬ひけりうしろかなし
宿れさくらも。
口 四十ナウ
○ゆふ雪れ雲れけしき。まびさしにかすこく。花れ愛
しるさいず忍ともをも。けつがやとぐ絶なふ。され御た
ちうがうえ。
致仕大臣
木れしこの志げくまあまくさきまま君のころ
もきしるまちかれ。致仕大臣ハ柏木君の御父也
夕旁 十三ナウ
○月くまるくすこわしりく。きりにもまきまぐさ
いりまりあさいかるひさしれ彩ハ。おどもなきさしち

すまバ。月れかかりむかむかるやうなる。
清法 十四ナウ 夕旁君ハ
○すごろなるやうやと。おかけなきころはすりし
うどいかならむ世よ。何りしだりも見なるむ。かけにも
ゆしゑをしまきうぬことなぶあころにもたるまぐれお
りひわしりけるものをこゑハけひにきうせしまえぐれ
なりぬるにころはつゝあまむすしきゆうしてもこ
まぐ見なしむれんざしうなふべきをりは。していう
よりかうにいうくうゆしむと。おりふにつくこもあへぐれな
うまくく。女房れつるうざりさわきまどふを。つるまま

紫上の葬送の模なり

なれやすぐなあらんはまどひなきぬ見てくまほうな。
夕霧君の心
ちまいるましひのやうくされ[illegible]ふまゝまゝるんと
おもかゆるもわりなさことなりや。
口 十六丁ウ
○ちるぐとひろき野れとゝろもなくたちてゝてかき
まなくいうかしきさはうるれど。いゝそうなきけゝり
にくかどなくのわりたまひぬるもまいのことなれど。
源氏君の心
ゝのへなくいうし宮ゝ[illegible]ゝ[illegible]むさゝちしくひとゝかゝる
てがおりしまけるを見てくまほうへもさばかりい
つうしき[illegible]身をとりのくんあらぬけずさへなるぬん

紫六

なりけり。
○ 十七丁オ 源氏君の心
○むかし大将れきこのゝ[illegible]ぎこうせまつりしゆきれ。
ゝのう月をおりひいほうふもうまいなかりのくおかしけるか
まやほきのうかれゝのきこうなおがしし[illegible]。[illegible]ハまで
くまきまどひまつり。十四日まうせまひくいまハ十五
日れ暁なりけり。
口 上
○日 [illegible]
日十六日の朝也
まゝるくまなくて世中おがしつぐくるよいとぐいゆきも
源氏君の心 紫[illegible]
しくいうしけれバおくるとくもいく世うハふべきかるう

ましさはまざまきまゝ。むかしより此ゆかいもとばまかしく
おもかせど。心よりまさに妓のうしろ紙おかせは。さはかど
をすぐさんとしあふに。猶のせさつくるがたへがたか
りけり。

口十七ナウ
○風雅分ぞちく吹ゆふぐまゝにむかしはとおぼ
いでゝ一夕雪の心業にてくまつりし物をと。忘しく想ぶ
えあふに。まこかざりはかどの夢はてちせしなど。人
志まぐおりひつぐけあふに。たへがてくるすけまぶ。ひ
とめにはさしも見ゝしとにてこゝく。あこぐに仏くと。

ひさあふすぐはかぐまぐさはしてぶ。あこぐにはまえ
りてけちあひける。

夕雪天
ましへは枕のゆふべは忘しきまゝ。いまをと見ゝし
あけぐれの夢ぶるごうさへうかりける。

口十八ナウ
○いましへより四ツ身はつりきまゝおぶしはぐくるに。かく
源氏君の心
こに見ゆるかけをたじめて。ひとにはこゝとなりける身なが
ら。いたけなきおぐとなりかなしくつゆなき世を忘ひ
志るべく。仏などはすゝめあひける身を。心づくすぐ
しくつひにきしるこゆくさ純もたゝしつゝじと。おか

ゆるかなしさ我見たるかし。

○ 廿丁ウ
○ うられけしきもまだなるねバ。四子の義人のかね
しくなりなふ。つかまをすることなど。おまやうなきこ
えあひくちしな。

致仕大臣
いましへの杖さへこのあちらしくねまをし袖り
家ぞおきうふ。源氏君心 をりうらまゝろ所のふることおぼし出
らまくなるとなくうれ杖のこと。あひしうかきあつ
めさぶらくなくぶ我もらひもつへ給ひなまぎれなほ
うへし。

源氏君
家けさいむりしいまともおりかぐだわりさ杖の
よこうたゝけまし。

は 廿一丁オ
○ さしもなるまじき人さへ。うれしろいかぜのおと出
れしゑまつけ法ぐ。なまぐおとさねいなしまして
紫ゑゑ
かれうまもかんそてまつりしひとれ。おりひなぐさむ
べき世なし。ゆしろむつまじくたうまつるまな
まてるをとく。志げしものこれる命うらめしきこと
をなげきつ。あまなりさ世のやうの山ずこなぐ
に。おもひろもつりけり。

幻 三十オ

○さしもなかるまじかりけることにつけつゝ中ごろ ○紫上の心
ものうらめしうおぼしたる気色のとき〴〵見え
たまひしなどもおぼしいづるにたはぶれにても 源氏君の心
○またまめやかに心ぐるしきことにつけてもさや
うなる心を見えたてまつりけん。なにごとにもらう〳〵
じうおはせしこゝろばへなりしかばひとのふかき心も
いとよう見しりたまひながらゑんじはてたまふ
ことはなかりしかどひとわたりづゝはいかならんとすらんと
おぼしたりしにすこしにても心をみだりたまひけんこ

とのいとおしうくやしうおぼえたまふさま。むねより
もあまるこゝちしたまふ。
○三十ウ 入道の宮のわたりはじめたまへりしほどを
りしもいろにはさらにいだしたまはざりしかどことにふれ ○紫上の心
つゝあぢきなのわざやとおもひたまへりし気色のあ
はれなりしなかにも雪ふりたりし暁にたち
やすらひてわが身もひえいるやうにおぼえて空の ○源氏君の心
けしきはげしかりしにいとなつかしうおいらかなる ○紫上のさま
ものから袖のいたうなきぬらしたりけるをひきか

くしくせめくまきこいしまつりしかどれよういな
ぶ我和りすぐら西めまくもまこハいかまんせよ
うとおぶしけぶけるゆゑのふしもざらしよおさ
女房なるべしいこうもけりにあるなれ。
いふを寄つけまへるまだこれなりのこちするよ。
ゆゑこいれさびしきもいふくなくかるし。
源氏ぶ うき世よハ西き清なんとおりひつてさひれ外よ
なかがほどふる。
○ 例 ヒナウ れまざらいしよは。ゆてうづかしておるひまふ。

うけこうるゆうおうしいでゝ。ゆゑ火桶まゐらん。
○ 五下オ 夫れ世よつけくハゆかずおりふべきことをきくある
源氏家の記
ましう。たうき身にハうまきなるゞこまさ人よりもこと
にくちをしき契にもありけるなるとおりふことをそ
ぞ。世れそうなくうきをしらすべく。佛などれおさく
なへる身なるべし。うきをしひくしらぬがれよなる
らふまゞ。かくいまれゆふべちうきすゑよいこしき
さしれとらゞあを見つるよすくせれれどもこゞろれ
こころのきはものこりなく見えてこころやすき

にゝいまるん家のれがぐしなくなりまゝるを。ふまれ
かくるく。いりしよりげよめるゝ。ひとくの。いまかと
て四きわりまんかどゝろ。いまひときれ。ひこぐ
まぬべけまいとゝろるしかし。わろうりけるこゝろれ
かどうなとゝく。ぬ目おしのごひかくしかゝまぎま
ぐやがくおがるゝ御洞を見なるひとぐまし七せ
きとめむうゝるしさゝくうち拾くまゝくまゝ
るんがうまりしさをおのくうち弟まわしけれどさ
もえ寄くぐむせかつりくやこね。

○人にむかたむかとばかりハさしくおりひしづめこ
ころをきめんとおりゝとも。月ごろまがけるゝとむこ
れありさまかくすしきひぐとまぐるゝ。すゑのよ
の人まもるやまきん。後の名きへうそ何るべし。思
かまくるむ人にも見てざるといはまむもおな
じことるれど。なかまきておりひやることれ
ゝるるよりも。見ぐるしきことれめよ見るハこゝるく
きはまきりくをこゝるりとおがせば大物れさゝるど
にぐよこゝすべそくう。蜀面しまひける。

○ 十三丁オ 故きさいのみくまゐりしまゐむ。花のうち
源氏君関藤ゟ女房のうち
を見くもまくとよ心あらばとおぼしうまさはおか
うこれ世よつけくおしかりし。ほかりさ事ゆゑきるく
より見なりしさくさるとぢめれるしさも。人よう
さしとよおぼしまり。みぞうとりわくんざしにも。
掬れにのさまハうらぬわざるりとしへぬるひとよお
○紫上のうち
くまくんをきめむうるくわすれがうきもたゞか
うるなうれうるしさのこよはあらぬをきるきれど
よりおもしそしかりさ事りろともに老ぬるす

恵れ世ようちすてまゐくわが身もひとれこも。ぶひ
はぐけしくかるしされまへがうきにまんすべてものの
れと君も。由恵なのることもおうしきすぢもひろうなも
ひめくらぬうぐうふとれあさうずるるまんあり
けふるど私ふくるまくむうしいまれぼりのうり
にかくてもこのしつへき私をとおぼしるがうかつりた
まふを女もりれと君よおりふべし。
○ 十七丁オ 夕霧君の紫上をとり
初れうよ見しぼおりげうよわすれがうしまゐく
さいとわりううしとおりひゐるまへり。

○日 十八丁オ
なるごとくつけくも思ひがけさ[illegible]こころにわさ
れつくましくぐるにしてといふこともはてまひおぬ
にまゐれはるかとくぎひのかけるこちなきこと
るもいかましつまくうと。寄ひとたゞなるべし。
源氏君
なき人にしのぶる宵はむしなまぬまてやきつ
ゐ山かとくぎひとくいかゞうら紙ながめなまふ。
大将。
夕霧君
おとくぎまとさこそつくるんふるさとはあらしちだ
なはいまがきりと。

此しきぞ増りに増る。人の身にいふ事なる。泪かるらん。

吾のこゝや。[illegible]ふん。日くしの嶋なげの。やまとなでしま。

夕殿蛍飛思悄然
孤燈挑盡未成睡

○日 十九丁オ
いとこのつきこころずゞしきかゝるまくながめなふ。池の
源氏君のこと
葉はさうりなるを見なふ。いかにおわりるなどまぞおぼ
ぬしおしくにおまくしてつくくとおもするかどよ。
日もくれはけり。日ぐしは春をなやうにおもへの所ぐ
しこれゆゑぞへをひとりのこ見なふ。いけまがかひなりけ
ふ。
源氏君
つまづへとわるなきくらひ夜は日をかことがましき雲
はしゐ[illegible]。雲はいとおわりとびちがも夕殿(セキデン)はかる
とむぐと例はふることもかゝるすぢのこくちなれ者

まつり。

源氏夫 ようをしるかたるを見えくもかなしきハ附ぐとも なき

おりひなりけり。

口 十九丁ウ ○七月七日も例にかたりしることおかくに[illegible]ひなど

りしあはぐつまぐくなるゞあくしに給ふ 仰合える

ひともなし。まゞ裁ふうひとところおきあひくつ

戸おしつけあつるに。前裁の家にとしげくわたどのく

とよりにかりくに見わたさるまゞ。おあひく。

源氏夫 七夕の所ふせハ雲のように見えくわるまの[illegible]

宮居の八重の小
[illegible]
[illegible]

ゆゞおきそふ。かぜの[illegible]

も。[illegible]

げなり。

口 廿丁オ ○いまさぐつにける月日とおぼすにもあきまさくなり

しくしにあふ。

檜姫 五丁オ ○をりくにつけるに花もこゝろの色をもまい紙もおなじ

こゝろに見えもやしあひしにこゝろすぐさむとも[illegible]

けまし。

口 六丁オ ○[illegible]

うちかいしつゝ。おのがじ、きへぼうこゝろまどをつゝみはたう
なきさいとく見なひしうどもほうびたなれぬをうらやま
しくなずめなひく。君ぐちるほうことごもをしへ寄しなふ。
いとおかしげよちひさ此ほうおどよとりぐかきなしてまま
りのく孫どもと君におかしくきこゆまじ。なこゝをうけ
たゝひく。
うちすてゝ（うぶそのまゝ）はうびさりし水とりれうりのおのうたた
ちおくまをけむ。おころぼくしなりやとめおのごひしまふ。
うちいときよげよおいしまとゝ入なり。

推古十八丁ウ
○八月廿日れかどなりけり。おかりくのうれけしきもい
小ごしきこゝろ君ぐちは（宇治の姫君ぐちは）物ゆかぎりれたるまもなく。お
がしなげきつゝながめなふ。五日れ月のいとたなやうき
しおくこゝげのおりくもさやうなすこたるをうゝのふれ（又久久の出りの）
とみあげきせく。見いぐしなつゝなかけれ多かすなひ
ぢきこくおれ親なりぢうりになん。うせ（八宮のこ）なひぬるとなく
まうれ。
○ロ廿一オ
いけぬよれこちしなぐら。五月にもなりぬ。野山の
けしきまして神のしぐれをりふかしがちまともすれば

浮母天の身を殺
こまひし詩ふく右
をがみけるを

見なりまゐらせ。大君のさまへ
にくかたり面へるゆゑ。かくしまゐらせ。おもぶ神さまへるゆう
ちふしまへるを。かくなぐらむしのうれゆゑまくも。
見るわざまゐらせ。おりひやぞたる。
○我まゐらせ。いさゝかれまゐらせ。なりけむ。をき
まゐりしかどまゐ。家ところおりまゐなることなく。ち
ゐとぞりへ出まくなくて。ひらひらるよ。いまそかぎり
のこちまゐも。我をおくらしけしきをぶる見せ給
れざりけるがつくきことくおりゐよ。おしぞりせいふ

おしとゞしくなくさゝ。わうきみどもれゆうなり。
口 十二丁才 美人君の仏浮母の身をふひさまふ
○ 一のりしさゝかたち。いとあいぎゆうづき。掛りしかりし
けれひなどれ。いうしく悪しくうるしけまゐ。浮母の親王の
世ゆゑ
よいなどかくしもおりひいまぞのどうまくすぐけん。
中ぐいまいさゝに心しぞめんうるきゆくまくゆしき
おとれうずしらとかることれすぢよつけく。いうしう
掛おりゐべきすくせまりけりさゝとよおくろざれ
ゐ。乃ゆよさくこゝろしゆゑ
ゐし身れ。おりひのかうよ。かくまいのひとまくなが
らゐを。かとけまどれにくしと見ゐゐやひとれ心

をおこさせんとく。仏れしたまふ。方便は。慈悲をも
かくしくゞゆうまうはあるれど。おりひつくけまひ
つく。おこるひをのこしまふ。
○口 十三丁ウ かれ文ちゝ。ゆしく二ゑるハりのもおがしまたび。
白ゑゑし
うつし心もなさささまるく。いうるゐりのくけるん
などさわぐよ。やうくなこゞつくしまひて。おがし志
づまるにしりがつりしさるハ。悪しういうしく思
ひいでゝまをひける。人ハまだ三ゆまひおりさ
さるまのこゝ見せく。かくまだゝるるいやめの童を
洞がちるるさ法也

志ゝせどゝ。かしこくりくかくすとおがしけまど。おのづ
らいとしるゝりけまどハいうるることよかくおがしまどひ。
三 人命もあやうきまぐ志ぼゝまふんといふ人もつり
けまどハ。笠志志のまん ハうれ殿まもいとよくおれはけしきをきまふ。
薫君のむ
されだよなるかようけふこかよハしのこにもあらぬ第
けり。見まひくハうるゝどきおがしぬべうし人がう
しまゞうへましうバ。まだゞるるよりハ。わがうあまをお
なることもおきるまし。おがしまるんこがるむ
もすこしさむるあらしまひけるか。

口 十四丁オ
○白文ハ此ニ云ふ ひよ。日くまゝわりあるゝぬ人なく。
世れさわぎとなりてゐるゝ。ごぐしまさけすゝぬ忌
ひまさいりわくく。あらざらむもひがこゝろべしと。おが
黒君の白文のうえん
しくゆわりあふ。うれしろやアハ文とさこゆふも
うせあひまけまバ。江をぢれぶくまく。うとまびする
も。あらろれうちよゝ衣よおりひよりへるまくつき
ぐしくこゝ由。すこしおりやせく。いとぐあまあうしさこ
ゆくまさりあへり。ひとくまうでく。あわやうするゆふぐ
まなり。白文ハ云ふし。あげこゝくのこゝハ。ゆゝぬ江こゝちな

まバ。うとき人まこう。ゆひあちゆ。こまとれうちそ。
伝いりあふひとまハ。黒面しまハどりゆらぎ。ふわ文の
黒君ふん
ちむも。ゆいあくつゝまし。ゆくまふまつけくも。いとぐな
こゝぐまずせさがらさ。ゆおゆせど。おりひしぞ。
白文ハ
おどろくしさうろにり。ゆをこゝ人ハつくし
むべきゆゝひのさまなりとのこゝ掛まれバ。うちまも文
にも。おゆしさわぐがいとくしく。げよ世才れつゆな
さをもむ。ひがうく。ふひあふるとく。おしのごひまざさう
ちしまへど。おがもなこゝれやがくゆぐこゝろぐふり

おつまじバいとたしこまけまでとうあらどしもいかぐか
さらくむ。たちぐやしく。心よわきことやこゆらむ。
おぼしきもたばかしさりや。蓋君の心 たまぐさのことをのこおぼ
ありけり。いつまりありけむ。これをいかをたりしとりの
まらひしあふこちよ。月ごろおぼしわかりつらむ
とおりふまさ。蓋君 おきこ。ハうすしきハわすまあつるをさ
白文の心 よあるくもおろかるかれ。りのくせちよおぼゆるとこ
はいとからねるまつけてぐよ。寒とぶとりの時を
たるふもりまわされてこうかるしけまわがかくまで

吾妹子が来てハ重そふ。桔木枝をもむつまじ。知りとせハ。

ろよ心よわきよつけてもりし心をえらんよさいふ
だりりのくなりまをしらねひとよもならぬ世中
はつ[illegible]のきことをしらくおりへるひとしもつまるのき
とうらやましくも心よくもおぼさるくりのうらまよ
だしらまあたるおまよむらひてんさまもお
ぼしやるようみづうしとまうちゆりあふ
は 十丁オ 蓋君の言語よりも[illegible]
○こちまでぐらぶ。ぶくむつへとりあまぐるりよけること
くやしうあはおとのきこゆるかぎりハ心のこさわぎ
あひてかしをぐよたづ[illegible]るりよけること。つきま

しくてもやこめるゐるゐるさまるまくいづまの
うこれうつせまじまけむなどやるるまくおぼ
ひ。

紫文製錦六巻 平